

研究課題（テーマ）		手術看護の臨床判断「気づき」に焦点を当てたストーリー型手術看護教材の開発	
研究者	所属学科等	職	氏 名
代表者	看護学科成人看護学急性期講座	助教	竹口 将志
分担者	看護学科成人看護学急性期講座	講師	寺内 英真
研究結果の概要			
【背景・目的】 手術室実習の学習機会が限られている現状を受け、手術室看護師の実践知を学ぶ教育を目的として、令和4年度に virtual reality 手術看護教材（以下、VR 教材）を作成し、学習の効果検証を行った結果、理解度の向上は認められた。一方、侵襲的処置に伴うケアを経験することは難しいという課題が報告されている。 そこで、Tanner CA. の臨床判断モデルを踏まえ、手術看護場面での知識と看護技術をつなぐ「気づき」を強化するストーリー型手術看護教材（以下、ストーリー教材）の作成を目的とした。 【方法】 VR 教材の先行研究結果をもとに、看護学生の興味・関心を抽出し、「気づき」に焦点を当てた学習目標を設定した。具体的には、5 場面（入室前、全身麻酔、体位固定、術中除圧、術後退室）を統合し、それぞれ医療安全、麻酔・手術体位に伴う合併症、術直後の状態変化に伴うリスクを理解し、患者の安全・安心につながる看護ケアの必要性に気づけるよう構成した。また、構成内容について学部業者と連携ながら、VR 教材の改修およびシステム構築を実施した。 【結果】 従来の VR 教材では、3 場面（入室前、全身麻酔、術後退室）と 2 場面（体位固定、術中除圧）に分かれており、学習ツールもノートパソコンと VR 空間で別々に提供していた。今回作成したストーリー型教材では、入室から退室までの一連の 5 場面を統合し、VR ヘッドマウントディスプレイを使用せず、ノートパソコン、タブレット、スマートフォンによる学習を可能にした。また、体位固定と術中除圧の 2 場面は、3D から 2D に出力を変更し、重要なポイントごとに視点を設定し、さらにテロップでの文字化を行うことで、知識と看護技術の連結を可能にした。 【考察】 ストーリー型教材は、手術看護の一連の流れを統合し、360 度の自由な視点ではなく、あえて視点を限定した 2D 化を行うことで、学生が看護技術に集中しやすい学習環境を整えたことが特徴である。その結果、情報量が多く注意が分散しがちだった従来の VR 教材と比較して、知識と看護技術との結びつきがより強化できたと考えられる。さらに、ストーリー型教材は複数の端末で同時に利用可能であり、VR に比べて学習環境の柔軟性が高まったことも大きいと考える。			
今後の展開			
今後は ARCS モデルおよびカークパトリックの評価モデルを用いて学習意欲や学習効果を検証する。さらに学生の自由記述や意見をもとに教材の構成や視点を改善し、教材の質の向上を目指していく。			